子どもゆめ基金助成活動

Let's Share.

あなたの輝き、つたえよう。

事業報告書

全国まちづくり若者サミット 2022

ON

オンライン配信も!

開催期日　2022.1.29(土)～1.30(日)

会　場　日本青年館8階「カンファレンスルーム」＆オンライン配信

対　象　地域活動に取り組む若者、これから取り組んでみたい方、応援したい方、関心がある方・行政・大学・企業・NPOほか

定　員　来場参加 60名　オンライン参加 200名

主催：日本青年館　一般財団法人日本青年館

協力：NISSEIKYO　日本青年団協議会

National Institution For Youth Education 独立行政法人 国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金助成活動」

体験の風をおこそう

■プログラムの概要

「全国まちづくり若者サミット」の３年間

「全国まちづくり若者サミット２０２２」が1月29日・30日の二日間にわたって開催されました。コロナ禍により、昨年に引き続き全面オンラインでの開催となりましたが、12団体が実践事例を発表し、１００名の方々がご参加いただきました。また、これまでご参加いただいた方々とともに実行委員会を結成、一部プログラムの企画立案やオンライン配信をはじめとする運営実務に携わっていただきました。新型コロナウイルスの感染拡大が過去最多を記録し、全ての人々が混乱の渦中にあっても、このような成果を数多くの皆さま方と共につくり上げられたことを改めて深く御礼申し上げます。

私ども日本青年館が標記事業を開催して、今回で３回目となります。これまで私どもは長年にわたり青年団をはじめとする地域青年活動や青少年教育の支援に取り組んできましたが、この３年間は主に以下の二つの流れに注目してきました。

ひとつは、２０１４年の「まち・ひと・しごと創生総合戦略」以降の国や地方自治体をはじめとする多様な地方創生に関する動きです。人口減少をはじめとする様々な地域課題の解決に向け、行政だけにとどまらず高校や大学、研究機関、様々な団体やＮＰＯ、民間企業なども含め、あらゆる分野で意欲的な取り組みが始まっています。もうひとつは、２０１６年より実施されている「１８歳選挙権」です。地方創生の動きと連動するように、選挙への投票に留まらず、学校でのカリキュラムや地方議会での動きなど、まちづくりや行政の政策に若者自身が参画する流れが顕著になっています。

このような情勢のもと、若者や学生による創意工夫にあふれた社会的活動が始まっています。この３年間、私たちは活動に取り組む若者や学生が出会い、学び、交流する場をつくるとともに、そうした情報を集め発信する、いわばプラットフォームとなることを目指してきました。その一環としてスタートした若者サミットには２０２０年からの３年間で４９の団体が実践事例を発表し、延べ２９１名の方々が参加しました。サミットでの学びや出会いが新たな活動のヒントや互いの支えあいにつながっています。また、団体や地域を越えたつながりを構築していこうとする動きも始まっています。

日本青年館は２０２１年、財団設立１００周年の節目を迎えました。財団の歴史は若者の地域活動を応援してきた１００年でもあります。地域の持続可能性が根底から問われている今だからこそ、若者の地域活動を応援する取り組みはますます求められています。その先に混迷の時代を切り開く新たな地平が見えてくるに違いありません。

一般財団法人日本青年館

開催概要

■期　　日：２０２２年1月２９日（土）～３０日（日）
■会　　場：zoomによるオンライン開催（日本青年館８階カンファレンスルームより配信）
■参加者数：１００名（参加登録者数　２９都道府県）
■主　　催：一般財団法人日本青年館
■協　　力：日本青年団協議会
■運営体制：
ファシリテーター：井口啓太郎（文部科学省）　奥　ちひろ（秋田県南ＮＰＯセンター）
島田　茂（元日本ＹＭＣＡ同盟総主事）　辻　智子（北海道大学准教授）
澁谷　隆（一般財団法人日本青年館）
実 行 委 員 会：井須　良麦（多摩市若者会議）　長田　拓真（学生団体トップファン）
高木　康裕（多摩市若者会議）　高野　義裕（多摩市若者会議）
筒井　涼斗（学生団体ＹＵＺＵ）　楢島　杏奈（多摩市若者会議）
西川　遼馬（飯山市若者会議）　三田希美子（一般社団法人ＮＥＬＤ）
zoom 配 信 運 営：多摩市若者会議　合同会社Michi Lab
■協　　賛：伊熊　公一　大坂　祐二　大月　悦子　宍戸　稔　白井えり子
（敬称略）　株式会社ニッセイ　合同会社Michi Lab

日程

２０２２年1月２９日（土）（会場：会議室イエロー）

時間	内容
12:30	開会式 主催者あいさつ 課題の提起
13:00	オープニングセッション 進行：奥ちひろ（秋田県南NPOセンター）
14:30	休憩（１５分）
14:45	トークセッション１　最初の一歩、みんなの一歩 登壇団体 ・学生団体ＹＵＺＵ ・大正大学地域創生学部パークトラック班 ・鯖江市連合青年団（福井県） 進行：井口啓太郎（文部科学省）
16:15	休憩（１５分）

16:30	トークセッション２　つなぎ、生み出す 登壇団体 ・Crenection ・NPO 法人アクションポート横浜 ・高知県青年団協議会 進行：澁谷　隆（一般財団法人日本青年館）
18:00	休憩・移動
18:15	交流会企画「ランダム単語ガチャでまち案内」 進行：若者サミット２０２２実行委員会
19:15	初日終了

２０２２年１月３０日（日）（会場：会議室イエロー）

時間	内容
9:00	トークセッション３ 実行委員による企画「課題解決グループワーク」 進行：若者サミット２０２２実行委員会 グループＡ　活動の継続性　グループＢ　アンチとのつきあい方 グループＣ　活動と仕事　　グループＤ　集まれ！高校生
10:30	休憩
10:45	トークセッション４　まちの魅力を再発見 登壇団体 ・ちくせい若者まちづくり会議（茨城県） ・かわさき若者会議（神奈川県） ・ながさき若者会議（長崎県） 進行：辻　智子（北海道大学准教授）
12:15	休憩
13:15	トークセッション５　高校生が奮闘中　～SDGs と地方創生～ 登壇団体 ・Teenalight ・加茂農林高校（岐阜県） ・遊佐町少年議会（山形県） 進行：島田　茂（元日本 YMCA 同盟総主事）
14:45	休憩
15:00	クロージングセッション 進行：辻　智子（北海道大学准教授）
15:55	閉会
16:00	終了

「課題の提起」

はじめに

「全国まちづくり若者サミット」は 3 回目です。このサミットは、日本青年館青年問題研究所とそこに外部から研究委員数人が加わって計画を立て、さらに今年は、そこに 1 年目、2 年目のサミット参加者有志に実行委員として加わってもらって企画・運営をしています。

このサミットの目的は、**若者が主な担い手となって地域で活動している、さまざまな団体・グループや組織・機関が、一堂に会して、交流し、お互いから学びあおう**、ということです。開始に先立ち主催者としての思いを「課題の提起」としてお伝えします。これから始まる 2 日間のサミットで、「皆でこういうことを考えませんか？」「こういうことについて皆さんの考えや経験を聞かせてください」という投げかけとして受けとってください。

１．若者の地域活動を応援する施設としての日本青年館

このサミットと一見、似たようなフォーラムや集会は、現在、各所で行われているようです。それらに対して、このサミットは、何がどのように違うのでしょうか。そこで、まず、日本青年館がやる、日本青年館でやる意味を私たちがどう考えているかをお話します。

そもそも日本青年館は、若者たちの地域活動を応援する施設として生まれました。今から 100 年前のことです。当時、日本中のすべての地域に「青年団」「青年会」と呼ばれる若者の集団がありました。台風で道がなくなればそれを直したり、伝統的な行事を受け継いで地域の祭りを取り仕切ったり、村の外から講師を読んで講演会を開いたり、夜に集って皆で語りあったり、そして村の新聞や機関誌を発行したりといった具合に、多くの若者たちが、その土地の暮らしに密着した活動をしていました。若者たちの地域活動は、それを通して**若者たち自身が学び成長する機会（青年教育）**であると同時に、その活動自体が、**それぞれの暮らしの場（地域）を支え新たに創造していく**ことにつながっています。

２. 経験と知恵の蓄積の共有と「共同学習」

とはいえ、100 年という歴史の中には、苦い負の経験もあります。昭和初期、経済恐慌が起こり、村も若者たちも苦しい状況に置かれる中で、日本は戦争（アジア・太平洋戦争、帝国主義的な植民地支配を含む）へと突き進んでゆきました。青年たちは自ら銃をとって戦うだけでなく、人々を戦争へ駆り立てる役割も担いました。戦後の出発は、ここからの反省や悔恨なしにはありえず、なぜそうなってしまったのか、二度とそうならないためにはどうしたらいいのか、という問いから、地域の青年団・青年会も、日本青年館も、再出発しました。

地域青年団の全国組織として新たに発足した日本青年団協議会（日青協）では、反戦平和を掲げ（「青年は二度と銃をとらない」、広島・長崎・沖縄・ソウルなどでの平和学習等）、政治的立場を超えた国内外の交流を生み出し、地域の問題を考え（農業・出稼ぎ、女性の地位向上、部落問題など）、その解決に向けた実践を試み、暮らしを豊かにする文化やスポーツ活動に取り組んできました。その根本にあるのは、**悩んだり迷ったりしながらも青年たちが自分たちの手でとりくむ**ということ、**自分が暮らしている場所（「まち」）での実践（活動や行動）を通して学ぶ**ということでした。

そこでの合い言葉が「共同学習」です。実践が独りよがりのものにならないよう、自分たちで検証しあい確かめあう学習活動が生み出されました。その特徴を簡単に言えば、１つは、教える人

ー教えられる人、指導する者―指導される者という関係ではなく、皆が対等に学びあう関係をつくろうということ、2つは、日常生活や暮らしの中で感じたり悩んだり困ったりしている具体的な体験を出しあい一緒に考えよう（「一人の悩みを皆の悩みとする」）ということ、3つは、バラバラのように見える悩みの根っこや背景にある「共通の問題」を見ぬき解決に向けて考えあおうということです。その過程では、専門家や現場の人から話を聞いたり、調査をしたり、レポートに書くということも行われました。現在、日本青年館の資料室には、こうした活動の中で書かれた膨大な記録があります。青年団員が 400 万人もいた時代からですから、皆さんがお住まいの地域の、かつての若者たちの足跡も、これらの記録の中にきっと刻まれていることと思います。

ところで、「共同学習」の源流には、グループワーク、ワークショップ、ファシリテーション、ディスカッション、エバリュエーション（評価）といった、現代の皆さんにもなじみ深いものがかかわっています。戦後、これらを学ぶ講習会が日本青年館でも開かれ、青年や若者の活動にかかわる様々な人が全国から集まって体験し、それを地域に持って帰っていきました。一人ひとりが主権者となって自治体や国の意思決定にかかわり、家や地域や職場を皆で共同的に運営してゆく（民主化）ための方法として考えられていました。

このように、紆余曲折を含む多彩な経験とそこから得た知恵を、私たちは日本青年館で皆さんと共有したいという思いを持っています。

３．「違い」から学ぶ

さて、これを踏まえつつサミットに向けて、具体的に２つのことを提起します。１つは、**「違い」から学ぶ**ということ、もう１つは、**「思い」を語りあう**、ということです。

今日、ここには全国から様々な団体が集まっています。

長い歴史を持つ、地域青年団や青年会のような団体や、世界的なネットワークを持つＹＭＣＡ・ＹＷＣＡのようなところもありますし、昨年、始めたばかりといったグループもあります。また、個人が呼びかけて生まれたグループもあれば、市役所など行政の施策や声かけによってできた団体、高校や大学など学校の教育活動の一環というグループもあります。NPO や企業の方もおられるかもしれません。あるいは、青年会館・青少年会館といった施設の関係者の方や、青年団ＯＢがつくったグループやネットワークなどもあるでしょう。また、その活動内容も様々です。

若者たちのアイデアや発想から始まるということは共通でも、具体的には、交流やイベントを企画する、住民どうしの交流や子どもから大人まで誰でも来られる場をつくる、生きづらい思いをしている人が安心して居られる場やちょっと挑戦してみようかなと思えるきっかけを生み出す、町を知り街の魅力を発信する、土地の農産物で新たな商品を開発する、自治体に対して提言を行う、住民にアンケート調査をするなど実に多様です。

このように、このサミットでは、あえて意識的に様々な団体や活動に集ってもらうことを意図しています。そして、その「様々なもの」「違い」から学びあいたいと考えています。

でも、「違い」から学ぶというのは案外難しいことです。「あなたはあなた、私は私、それぞれ違う」というのは大事なことですが、それだけだと「学びあう」にはなりません。そこで、ここでは、まずは「違い」を明らかにすること、「何が、どのように違うのか」を知ろうということを提起します。そして、「違い」を明らかにする、よりよく知るには、お互いに「どうして？」「なぜ？」など率直に質問しあうことが一番です。様々な人との出会いを楽しみつつ、どうぞいろいろな問

いかけを試みてください。問いかけられた人は応答し、応答された人はまた応答し……と時間の許す限り、対話を重ねていただけたら嬉しいです。簡単に納得せずに、「なんだかますますよくわからなくなった」「さらに疑問が深まってしまった」という「わからなさ」も大事にしたいところです。異なるもの（「違い」）との出会いは、ひるがえって自分自身を映し出すものにもなることと思います。

４．「思い」を語りあう

様々な団体が集まり、「違い」から学びあおうと言いましたが、他方で、ここに集った皆さんには、そもそも、「まち」や「地域」に関心があるという共通点もあります。また、誰に強制されたわけでもなく、自分がやりたいからやるという点も同じかもしれません。

でも、そもそも、皆さんは、なぜ、どうして、その活動をやろうと思うのでしょうか。また、どういう暮らしやどういう関係を、望ましいもの、大事にしたいものだと思っているでしょうか。活動の中で、「今まで気にしたことがなかったけれど、こういう暮らしをいとなんでいる人もいるのだなぁ」とか、「あの時、あそこでであった、あの人の笑顔が忘れられない」とか、「こんなにたくさんのゴミが出てるなら何とかしなきゃたいへんだ！」とか、きっといろいろな気づきや発見、心揺さぶられた経験をしているのではないでしょうか。心に残っている場面、ちょっと気になった事柄を、立ちどまって思い起こし、言葉にしてみる機会にしてください。ふだんはなかなか口にしづらい真面目な話になるかもしれませんが、皆さんの内に秘められた「思い」を語っていただくことを期待します。

今、様々に深刻な課題と直面している地域の中で、何かしたいと動き始めている若い人たちがこんなにもたくさんいることに、私たちは大いに勇気づけられています。皆さんには、ぜひここでの出会いから多くの刺激とエネルギーを持って帰っていただければと思っています。では、2 日間、どうぞよろしくお願いいたします。

※この「課題の提起」は、日本青年館青年問題研究所の皆さんとの議論を踏まえて辻智子（委員）が作成しました。

１，オープニングセッション

日にち　２０２２年1月２９日（土）
時　間　１３：００～１４：３０
進　行　秋田県南ＮＰＯセンター　奥　ちひろ

全国まちづくり若者サミットの目的を表すキーワードは「交流」と「学び合い」です。オープニングセッションは、開始にあたってご参加のみなさんが「交流」と「学び合い」の姿勢を整えられるようになることをねらいとして実施しました。

はじめに、どんな立場の方がどこから参加しているか等について遊戯性のあるアンケートを行いました。全国で活動する仲間や応援者が参加していることを確認できました。

これを踏まえて、グループに分かれての交流がスタートしました。「モチベーショングラフで自己紹介」と題したワークでは、参加者が自身の生い立ちや活動に関心を持ったきっかけ、活動してみての心の動きをグラフ化。これをグループ内で語り合うことを通じて、自分自身が今どのような状態にあり、どんな想いを大切にしてきたのか、そして、なぜサミットに参加しようと思ったのかについて見つめていきました。参加者同士が自己開示をしたことで、学び合う仲間としての関係性をつくるきっかけになったのではないかと感じています。

参加動機について、参加者からは「様々な団体の活動を知りたいし、自分たちも知ってもらいたい」「どんな想いや考えを持っているのか知りたい」「相談でき、高め合える仲間と繋がりたい」といった声が寄せられました。

２，トークセッション

■「はじめの一歩、みんなの一歩」
日にち：２０２２年1月２９日（土）
時　　間：１４：４５～１６：１５
発表団体：学生団体ＹＵＺＵ
　　大正大学地域創生学部パークトラック班
　　鯖江市連合青年団
ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ：井口啓太郎（文部科学省）

本セッションでは、ファシリテーターの井口氏から各発表団体に対し「個人が団体に関わったきっかけと、参加者に投げかけたい課題を話してほしい」と伝えられました。

この投げかけを受け、三つの団体が発表しました。トップバッターは学生団体ＹＵＺＵです。学生団体ＹＵＺＵは温泉地を活性化させるためにSNSを通じて集まった団体。現在、湯河原温泉のある湯河原町の魅力をつたえようとインスタやYoutubeなどで写真や映像を発信したり、地域の清掃やイベントづくりなど、意欲的な活動を行っています。ＹＵＺＵからは「今後も続いていく団体にはどうしたらいいのか」という課題が出されました。

「公園をどう活用したら地方創生につながるか」を提起したのは大正大学地域創生学部パークトラック班。大正大学がある豊島区は、区が管理する公園を活性化するため、軽トラックにコーヒーショップと図書館を組み込んだキッチンカー、通称「パークトラック」を開発。大正大学はこれを公園で運用し、にぎわいを生み出しました。公園は誰にとっても身近な場であり、参加者全員が参加できる話題といえるでしょう。最後に発表した鯖江市連合青年団は、成人式の取り組みや公民館事業のサポートなどを報告。地元に暮らし、活動する立場から「仲間集めやコロナ禍での活動、団員のモチベーションの維持」に関して問いがなげかけられました。

これら３団体の発表と投げかけを受け、井口氏から「何かを始めるにはどうやって仲間を集めるか」という問いかけをもってグループディスカッションに入りました。ディスカッションでは、団体や活動内容は異なっても仲間づくりの過程は同じであること、工夫次第で伸びしろがいくらでもあること、地元の人との信頼関係を築いていくことの大切さについて改めて気づかされた、といった声が報告されました。

■「つなぎ、生み出す」

日にち：２０２２年1月２９日（土）
時　　間：１６：３０～１８：００
発表団体：Crenection
　　NPO法人アクションポート横浜
　　高知県青年団協議会
ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ：澁谷　隆（一般財団法人日本青年館）

セッション２のテーマは「つなぎ、生み出す」。地域活動をより発展させていくためには各団体独自の動きに加えてそれらの人や団体、情報をつなぎ新しい価値を生み出し

ていく動きが不可欠です。このセッションでは「つなぐ」役割を果たしている活動にフォーカスしてみました。

最初に報告したのは学生団体Crenection。団体名は「Create」と「Connection」をつなぎあわせた造語とのことで、Facebook での地域活性グループの運営や活動する若者を取材し note で紹介するＷｅｂマガジンの取り組みが報告されました。ＮＰＯ法人アクションポート横浜は、地域で何かしたい学生たちのためにＮＰＯでのインターンシップをあっせんする取り組みを紹介。発表者のうち１名は、自身がＮＰＯインターンシップの参加者であり、プログラムを通じた成長過程をリアルに表現していました。最後に高知県青年団協議会は、若者が地域で活躍する「機会」や「きっかけ」をつくることをめざして様々な活動を行っていることを報告。人口減少が進む社会で、地域に住む者が助け合うことが大切だとし、活動を通じて人と人が結び合うための学びを強調しました。

いずれの団体も、誰かの活動や活躍をアシストする観点からの発表でした。

■「まちの魅力を再発見」

日にち：２０２２年1月３０日（日）
時　　間：１０：４５～１２：１５
発表団体：ちくせい若者まちづくり会議
　　かわさき若者会議
　　ながさき若者会議
ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ：辻　智子（北海道大学准教授）

本セッションは「まちの魅力を再発見」をテーマに、ちくせい若者まちづくり会議（茨城県筑西市）、かわさき若者会議（神奈川県川崎市）、ながさき若者会議（長崎県長崎市）の３団体が発表しました。

ちくせい若者まちづくり会議は２９名の大学生が所属しており、４つのグループに分かれて活動しています。今回は、若者たちの拠点づくりとちくせい情報紙「ちくっこ」の取り組みを報告いただきました。

かわさき若者会議は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、コロナ禍だからこそ市内の若者と地域がつながるプラットフォームとして始まりました。現在、中学生から社会人まで９７名が所属。代表といった役職はなく、上下関係もありません。活動への参加を強制することもなく、好

きな時に好きなプロジェクトへ参加する仕組み。そんなかわさき若者会議の悩みは活動したい若者が周辺自治体に流出していること。「地域課題は決して地方だけの課題ではなく、１５０万人都市の川崎市でも同様である」ことが報告されました。

ながさき若者会議は１５歳～３４歳の若者約５０人が所属し、８つのプロジェクトに分かれて活動しています。ながさき若者会議は自分の好きなことや強みから考える「ポジティブアプローチ」と「好奇心第一・多様性・自分のペースで・チャレンジ・学び・つながり」という６つのキーワードを提示。これらを大切にしながらプロジェクトを企画することで、幅広い若者たちが意欲的に活動に参画できていることがわかりました。これに基づき、屋外空間の魅力を体験・発信するプロジェクトや小さな移動図書館の取り組み、年に一度長崎に原爆が投下された８月９日１１時２分の５分前にリマインドするLINEグループ「黙祷リマインダー」、CMコンテストや居場所づくりなど、多岐にわたる実践をご報告いただきました。

各地に広がる若者会議。同じ「若者会議」といっても年齢構成や活動内容などの違いが明らかとなりました。各地の活動をもっと深堀りしたくなる素晴らしい発表でした。。

■「高校生が奮闘中　～SDGsと地域創生～」

日にち：２０２２年1月３０日（日）

時　　間：１３：１５～１４：４５

発表団体：Teenalight

加茂農林高校

遊佐町少年議会

ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ：島田　茂（元日本YMCA同盟総主事）

セッション５では富山県から全国に広がる高校生団体Teena Light、岐阜県立加茂農林高等学校、山形県遊佐町少年議会が事例発表を行いました。

Teena Lightは設立１年目と若い団体ながら、ボランティア活動や教育問題に関するシンポジウムの開催などに力を入れ活動しています。

岐阜県美濃加茂市の加茂農林高校は、獣害被害が深刻な同市金谷地区の道路に４０メートルにわたって「あじさい」を植樹しています。これは地元の老人会から里山保全の要請を受けたもので、お年寄りとも交流を深めながら取り組

んできました。あじさいの取り組みはさらに発展させており、あじさいを使ったハーバリウムづくりや地元B級グルメ「美濃加茂焼きそば」の普及など、地域と連携した取り組みが報告されました。

山形県遊佐町少年議会は、遊佐町在住の中高生が自ら立候補し、同じ中高生から選挙でにより選出された少年議員が少年議会を構成。政策立案から実行まで実際に予算をもって実行していきます。政策は中高生へのアンケート調査をもとに生活の身近な問題から、地域PR等のイベント開催まで多岐にわたります。2003年に誕生し今年で19期を迎えます。

同じ高校生でも任意団体、学校、行政と異なる属性でありながら、それぞれが地域に根ざした活動に取り組んでいます。活動体形は異なるものの、高校生の主体的な参画への課題として抱える「継続性や世代交代」など問題は共通していることが提示されました。

実行委員会による企画「課題解決グループワーク」
日時：２０２２年1月３０日　９：００～１０：３０

グループＡ：「活動の継続性」

担当

西川　遼馬
（飯山市若者会議）

井須　良麦
（多摩市市若者会議）

ここは主に活動の経験者をターゲットにした活動の継続性についてをテーマとしました。参加者数は 15 名ほど。このうち、高校生が２名、その他は社会人でしたが、高校生の活動経験値が高くスムーズに進行することができました。

最初に、継続する上で抱える課題を出してもらうと、大きく分けてと 3 つのジャンルで悩みを抱えている事がわかりました。

1、運営するお金の継続性
2、人材の継続性
3、モチベーションの継続性

次にそれぞれの課題についてどう対策をしているのか情報共有を行いました。

ここで進行上悔しい思いをしたのが、課題を抱えている団体とその課題に答えられそうな好事例を持っている団体とがばらばらのグループになってしまったこと。参加者の中には財政に経験豊富な銀行マンの方や他団体と交流をしていないながらも高いモチベーションで活動をし、人を惹きつけている人など、様々な方々がいました。もう少し上手くマッチングできれば良かったと、最後のまとめの際に反省しました。

いずれにせよタイトなスケジュールではありましたが、今回のセッションでは答えを出すものではなくて、議論ができる相手に出会い、議論したい内容に気付き、そのキッカケをつかむ事ができたのではないかと思います。

相手を知る事で自分の事を知るという体験を改めて感じ、心の底からわくわくしました。参加して、皆さんと作り上げた体験は素晴らしいものでした。参加してよかった。ありがとうございました。

担当

長田　拓真
（学生団体トップファン）

活動は必ずしも肯定的な評価ばかりではありません。中には批判や非難、ともすれば活動を阻もうとする存在すら出現します。でも、「アンチ」って本当に敵なのだろうか。少なくとも、私たちの活動に関心がある、という意味で、関わり方によっては強力な仲間にもなり得るのではないか。アンチとの付き合い方ってあるのではないか。そんな問題関心と着眼点から、今回のグループワークのテーマに設けることになりました。

このグループの参加者は６名。まずはそれぞれの「アンチ体験」の共有から行いました。ここで出てきたそれぞれの経験は、部活の顧問の先生や窓口となっている役場の職員、自分自身の親や直属の上司など。活動を進めるうえで、身近な存在こそがアンチになり得る、ということが共通項として浮かび上がりました。

これらの経験を、今度はアンチの立場で想像をしてみました。少なくともこの場で出されたアンチは、決して恨みとか妬みで活動を止めようとしているわけではなく、何らかの思いがあるはず。であるとすれば、相手の立場にたって言われた言葉を理解してみよう、これがこのグループでの到達点でした。

考えてみれば、相手の立場に立つというのはアンチに限った話ではありません。サミットが掲げる「違いから学ぶ」上で不可欠なことではないでしょうか。グループＢでの議論は場を変えてまだまだ続きそうです。

グループＢ　「アンチとの付き合い方」

グループＣ　活動と仕事

担当

筒井　涼斗
（学生団体 YUZU）

2021 年の今年、大学４年生である自分は仕事と活動をめぐって二つの課題を考えていました。ひとつは、まちづくりを仕事にするにはどうしたらいいか。もうひとつは、卒業後に仕事と活動とをどのように両立させたらいいか。大学生の多くが進路に悩むことでしょう。また、社会人の方々でも仕事との両立で苦労されているのではないでしょうか。

グループＣのテーマは「活動と仕事」。大学生４名、社会人１４名が集まりました。思った以上に社会人の方が多く集まった印象です。進行は、前半は学生と社会人とでグループに分かれて「まちづくりってどんなこと？どう関わっている」シートに記入し、書き出された意見を中心に社会人のグループは悩みごとを語り合ったり、学生のグループは社会人に聞きたいことを話し合ってもらったりしました。後半は学生と社会人とで一体になってグループに分かれ、学生からの質問への回答や意見交換を行いました。

奥　ちひろ
（秋田県南ＮＰＯセンター）

この意見交換では、仕事と活動を両立していくうえで大切なこととして、自分軸を動かさないことや人に助けを求めること、仕事だけでなく結婚や育児など生活の基盤との両立などの意見がでたほか、仕事とプライベートとは物理的な距離があったほうがいいという意見も出されました。まちづくりと仕事というテーマは多岐にわたり、どのような仕事もまちづくりにつながる、地域にいることそのものが貢献ではないか、という意見の一方で、会社員（＝組織人）になれば当然様々な制約があることも意見が出ました。

仕事と活動というテーマは、立場に関わりなくまちづくりに取り組んでいけば必ず直面する課題だと思います。暮らしや活動で直面する課題を語り合える場というのは本当に貴重です。参加いただいた皆さん、本当にありがとうございました。

グループＤ「集まれ高校生！」

担当

楢島　杏奈
(多摩市若者会議)

可部　絢子
（日本青年団協議会）

高校生セッションでは、「集まれ高校生！」と題し、その名の通り高校生を対象とした企画を行いました。

企画内容は、身近にある様々な社会課題をテーマに解決策を高校生みんなで話し合い、アイデアを出しまくっていただくものです。当日は、岐阜県立加茂農林高等学校を中心に元気な高校生たちが集まりました。

まず議論する課題のテーマを２つ決め、それぞれの解決策を話し合いました。議題は「高校生の投票率をあげるには？」「子育て世代を地域皆で支えるには？」です。これらの課題に対し、どんな些細なことでも積極的に発言していただき、高校生の皆さんの視点から課題を解決するためのアイデアを出していただきました。

「投票したら芸能人に会える」など高校生だからこそ思い付くユニークなアイデアが満載で、遊佐町教育委員会の職員の方からは参考にしたいという声も寄せられました。非常に楽しく充実した企画となり、あっという間に時間がすぎてしまいました。

この企画を通して高校生パワーの素晴らしさを実感するとともに、高校生のみなさんには高校生だからこその視点をこれからも大切にしてほしいと強く思います。

まちづくりは出会いから始まる

井口　啓太郎（文部科学省）

みなさん、二日間の「全国まちづくり若者サミット」お疲れ様でした！私は二日間、全国の若者たちによるまちづくり活動や地域と共に学ぼうとする青年活動を応援する日本青年館の研究所の一員として、みなさんの活動に励まされ、それぞれの団体の課題や悩みに、何か応援できる手立てがないかと、いろいろなことを考えさせられました。

その答えは簡単に出せそうにありません。一つ言えるのは、みなさんと日本青年館が一緒に考え続ける場をつくり、学び合う中から未来をつくっていくことが近道といえそうです。

そもそもこのサミットに掲げられる「まちづくり」とはなんでしょうか。最後のセッションで、参加者に問われたことでもありました。私なりの答えは以下です。

「まちづくりとは、地域の多様な人々との出会いと学びを生むプロセスである」

我ながらくどくて堅い雰囲気です。でもこう言うしかないかなと思いながら書きました。

「まちづくり」は、その地域で暮らすいろんな人との出会いからしか始まりません。ともすると、若者たちによる「まちづくり」活動は同質の「まちづくりに関心のある若者」同志だけの活動になりがちです。もちろん仲間を集めたり、活動に参加する若者が活躍できるように組織づくりを工夫したりすること、行政などから応援を得ることは大事なことです。

でももっと大事なのは、その「まち＝地域」で暮らす様々な人たちとの出会いを生み出すことです。これはそんなに簡単なことではありません。時間をじっくりかけながら、なるべくたくさんの地域の人たちの話を聴くこと、その話の中から具体的にどんな課題があるのか知ること、そこから自分たちにできることを考えること、こうしたプロセスが「まちづくり」の肝だと思うのです。

私は過去に東京都国立市の公民館職員として若者達の活動に関わっていた時、たくさんのことを学びました。その若者達の中には障害者がいました。障害のある若者を受入れる活動をしているからです。私はこの活動に関わることを通じて、これまでの私の人生や「まちづくり」の活動のなかで、いかに障害者と出会ってこなかったか、痛感しました。

私たちの社会はいつの間にか、同じような人たちで分けられた「分断社会」を生きています（その最たるものは「学校」ですね）。このことに自覚を持ちながら、私とあなたが違うこと、さらにここにいない異なる他者への想像力を豊かにすることが求められています。

「まちづくり」の活動に参加する時の一番の醍醐味は、自分自身が、異質な他者からたくさんのことを学べることです。私は障害当事者との出会いからたくさんのことを学びました。みなさんは、みなさんの「まちづくり」の活動では、その地域で誰と出会って、どんな時間を共にして、何を学んできましたか？

来年もまたここで出会って、そんなことを語り合えたらと思います。

違いから何を学ぶのか

奥 ちひろ（秋田県南ＮＰＯセンター）

2009 年、秋田県内で「若者会議」を始めました。現在は停滞期で、悩める日々を過ごしています。サミットでは、活動発表や交流から、仲間はもちろん若者を応援してくださる方も確かにいることを実感することができました。そんなサミットのテーマは「違いから学ぶ」でした。サミットで知り合った団体とみなさんの団体の共通点は何で、どんな違いがありましたか。

「ダイバーシティ＆インクルージョン」という言葉があります。ダイバーシティは多様性、インクルージョンは受容という意味で、多種多様な人が考え方の違いや個性を受け入れながら共に成長することを表しています。企業では、これに取り組むことがその組織を強くすることにつながると言われ、促進されています。私も所属先の企業で推進し、難しさを感じました。何が難しいのか―。多様性を受け入れることは、なんでもアリとすることではありません。そのコミュニティにおいて大切にしている考え方や守るべきルールという大前提があった上で、個々人の個性や考え方の違いを認め合うということです。また、「わたしとあなたは違うよね」で終わっては、活かし合うことによる創造も生まれません。

サミットで自分たちの団体と他団体との「違い」に触れたとき、みなさんにも様々な葛藤が生まれたと思います。「あの団体は自分たちとは価値観が違う」「あの団体はここが優れているが、うちでは真似できない」―この気持ちは、私が昨年のサミットに参加して湧きあがったものに他なりません。でも、一年前の私に伝えたいのです。「そこで壁を作ってしまえば、何も学びにならない」と。

この間、「若者会議と青年団」を考える機会に恵まれ、青年団について学んだことで、たしかに共通点があると感じるようになりました。逆に、地域について考えるプロセスと手法に違いのひとつがあり、青年団のほうが自分事として地域と向き合っているのではないかと考えさせられました。この気づきをもとに活動を発展させられないかと考えるこの頃です。

みなさんの団体がみなさんらしくあるために、必要不可欠な考え方や手法はどんなものですか。他団体との共通点はあるでしょうか。どんな違いがあり、その違いから何を学べるでしょうか。ぜひ改めて向き合う時間を作って頂けたら嬉しいです。

余談ですが、2013 年頃に各地の若者会議の共通点と違いを考えたことがありました。そのときの整理は、若者会議にはコミュニティ型の「秋田型」とプロジェクト型の「小布施型」があるというものでした。今年のサミットではさらに多様な若者会議が生まれていると知り、また宿題をもらったような気持ちです。

多様さが発展のカギ

澁谷　隆（一般財団法人日本青年館）

日本青年館は財団設立以来 100 年もの長い間、若者の地域活動を様々な形で応援してきました。とりわけ大正時代に行われた明治神宮の造営に延べ 11 万人の青年団員がボランティアで携わったこと

が設立のきっかけですから、青年団の全国組織である日本青年団協議会を通じた青年団への支援が事業の中心なのは言うまでもありません。その背景には、時々の地域社会が抱える課題に青年団が立ち向かってきた歴史があり、地域社会を支える多くの担い手を青年団が輩出してきた歴史があるのも確かです。日本青年館は若者支援と同時に、地域社会の発展も視野に事業に取り組んできたと言えます。3年前に「全国まちづくり若者サミット」を初めて開催し、青年団も含めたまちづくりに携わる多様な若者グループに参画していただいたことはある意味自然なことであり、人口減少や一極集中から連なる地域の課題も大きくなり、同時に関心を持つ若者世代も年々増えている今だからこそこうした場が必要だと考えています。地域創生をテーマに活動する高校生や大学生はもちろんのこと、行政からの支援は受けず若者自身の手で立ち上げた若者会議や、インターネットで海外からも仲間を募った高校生、全国のまちづくり事例をＳＮＳで発信する学生グループなど、地域活性化に向けた取り組み方も多種多様になってきました。違いから学ぶことを呼びかけた今回のサミットですが、2日間のプログラムにはかなり多くの学ぶ材料が集まっていたと思います。

３回目となる今回の若者サミットでは、コロナ禍ということもあり欠席せざるを得なかったコーディネーターの代役として携わったトークセッション 2 について触れてみたいと思います。別ページで報告が記載されているように、全国のまちづくり事例を SNS で発信する学生グループ「Crenection」、地域活動を行う NPO と学生インターンを結ぶ「NPO 法人アクションポート横浜」、高知県内の地域青年団が集まった「高知県青年団協議会」の 3 団体が事例発表を行いました。セッションの意図としては、自らまちおこしや地域活動を行うのではなく、それらを行う団体をサポートする立場の事例から学ぶことにありました。Crenection はそれぞれ活動するまちづくりの事例をオンライン上で結び付け、新しい事業が生み出せないかという視点からスタートしています。アクションポート横浜は NPO の活動に関心のある学生に一歩踏み出す機会を提供し、潜在的ボランティア層の掘り起こしが目的の一つと話してくれました。高知県青年団協議会も地域青年団はもちろんのこと、高校生や大学生、団体や地域の人たちを結び、お互いの学びや成長から地域全体の活性化を目指しています。共通していたのは、人・団体・活動を結び付けることでお互いにとってのプラス効果を生み、やがては地域や社会を変えていきたい、という思いです。また、誰かのために活動していたことが実は自分自身のためであり、地域のためになっていることや、異なる団体をつなぐことで新たな価値やたくさんの相乗効果が生まれたことも語られました。トークセッション 2 はまさに、「違いから学びあう」というテーマに沿った事例発表と語り合いがされたのではないでしょうか。参加してくれる若者や活動が今後ますます多様なものになっていくことが、若者サミットにとってとても重要なことだと改めて感じています。

暗闇に悩む若者の光として期待

島田　茂（元日本 YMCA 同盟総主事）

今回のサミットでは、私は、高校生の団体を対象とした第５セッションの進行役を担当した。登壇した３つの団体は、以下である。

１．Teena Light

（富山県を拠点とする全国の高校生ネットワークによる任意団体）

２．加茂農林高校（岐阜県美濃加茂市であじさいを使った地域活性化を行っている）
３．遊佐町少年議会（秋田県遊佐町の中高生を対象とした少年議会事業）

任意組織であるTeena Light、教師の情熱によって感化された高校生が学科の活動として主体的に生き生きと活動している加茂農林高校、若者の社会参画や市民意識を醸成する為に少年議会として制度化され、投票で選ばれた遊佐町の高校生など、それぞれ積極的に活動し、まちの課題に取り組んでいる。その中で特筆すべきは、Teena Light の創立者であり、代表の山辺雄翔さんの発表である。

山辺さんは高校２年生の夏に長期交換留学を志していたが新型コロナにより断念。自分の将来像や進学先等の高校生活の方向性を見失い、休校期間に社会の課題を想い、ボランティアサークルで活動した仲間と語り合い、任意団体を 2021 年 1 月に立ち上げた。県内の高校生に呼びかけたが、受験などの理由で苦戦し、全国の高校生にネットで呼びかけ、15 の都道府県、40 名の高校生が登録した、自発的に組織化された団体である。Teenalight は「中高生の社会参画の機会創出」と「若者と大人の協働コミュニティの形成」を設立目的として掲げ、地元の福祉施設でリモートによる認知症予防レクリエーション、発展途上国や国内の路上生活者への衣類支援活動、小学生を対象とした SDGs 啓発出前授業など、福祉・貧困・教育の分野で活動を展開し、ボランティア活動に限らず、産官学で社会問題を考察するイベントや首長、県議会議員との交流会の開催など一年間で自治体や企業の支援を得ながら、実に多くの活動を行っている。その間、富山県の統計や意識調査を分析し、2021 年 4 月に独自で 233 名の高校生を対象に高校生の社会問題に関する意識調査を実施している。それらの分析の結果、複雑化・多様化した現代社会が直面する課題や答えのない問いに対してより、実践的な対応力・解決力を有する人材を育成し、社会に対する課題意識を育む環境を形成しようと、社会活動から探究活動に活動の主軸を転換した。

今春、高校３年生の運営メンバーは大学生となるにあたり、Teena Light を一般社団法人に登記して、大学生のメンターとして高校生の探究活動を支える予定である。

Teena Light は、新型コロナ禍という時代の中で一人の高校生の苦悩から共感する仲間が立ち上がり、活動を開始し、任意団体を立ち上げて、ネットを通して会員を募り社会課題に取り組む活動を広げた。最も古い非営利組織（NPO）として世界各国に組織されている YMCA の創立の過程に似ている。YMCA は、産業革命の時代に劣悪な環境の中で心身を害する若者の状況を想い、22 歳の１人の青年ジョージ・ウイリアムズが 11 名の仲間と立ち上げた。Teena Light だけではなく、加茂農林高校、遊佐町少年議会の高校生が、暗闇に悩む若者の光として、将来にわたり持続する団体となることを願っている。

その言葉にどんな意味を込めたのか

辻　智子（北海道大学准教授）

昨今、各所で開催されている類似のイベントに比べ、この若者サミットは少々堅苦しく難しそうだと感じている若い方々がおられることを承知の上で、それでもなお、私たち（企画運営者）の「こだわり」は伝えたいということから、当日の冒頭に「課題の提起」を投げかけ、2 日間のプログラム全体を構成しました。その提起（「違い」から学ぶ、「思い」を語りあう）は、どのように行われたのでしょうか。

まず、全体を通して、様々な思いが語られ、

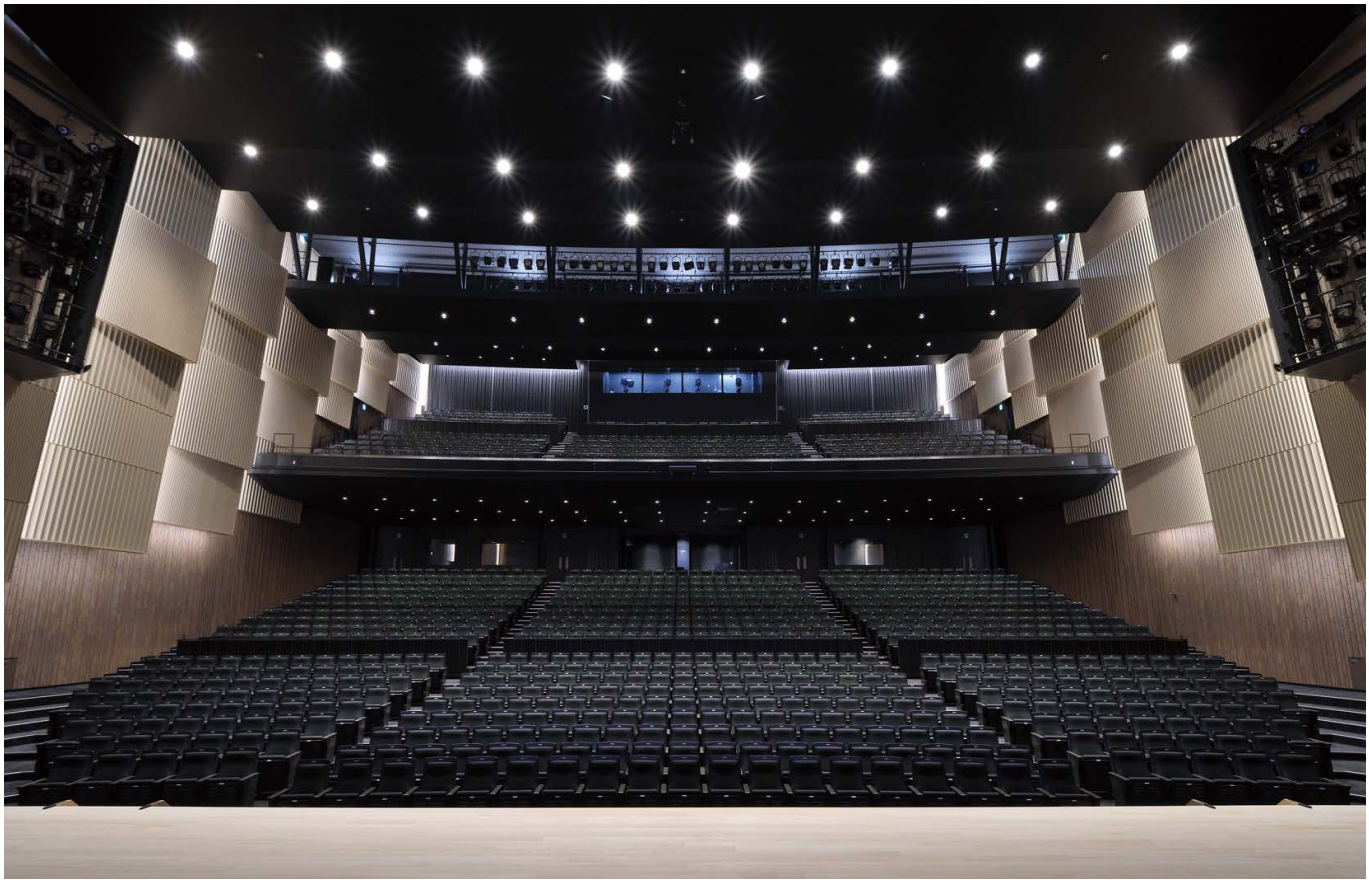
それを聞くことができました。特にオープニングでは、活動開始に至るまでの人生で出会った印象的な出来事やそれまでの生活の中で感じていたことを（ネガティブな感情も含めて）少人数で交わし合うことで、個人が、個人として、立ち現れてきました。私が参加したグループでは、小・中学校時代の暗黒な日々と、そこから解放された現在とが鮮やかに対比されました。「地獄」「縛られていた」とすら表現された子ども時代についての複数の証言からは、親や家庭や教師の個人の範囲を超えた根深い問題が浮き上がってきました。同時に、高校・大学や、家庭・学校以外の場で得た友人や活動の機会は、まさに解放と表現しうるものであったろうとも想像しました。各セッションの発表の中で、自由を謳歌し、やりたいことを夢に描いていたのに、コロナ禍で不自由な生活を強いられた大学生の状況とも重なって見えました。大学生たちは、必ずしもそれを前面には出しませんでしたが、そこには悔しさ、理不尽さもあったのではないかと想像しました。こうした状況にあって大学生たちが目を向けたのが、生活の場としての地域であり、地理的に限定された範囲（町内や行政自治体内）であり、転んでもただでは起きないタフさにエネルギーをもらいました。

ところで、語られた思いは自分だけのものに限られなかったのは重要な点でした。活動を通して出会った人々の思い、さらに、それに触れた自分の思いとの対話は貴重な学びとなっているように思われました。その対話は、必ずしも直接的な言葉でのやりとりではなくても、相手の言葉を自分の胸の内に留め置き、「なぜ？」「そこにあった思いとは？」と想像しながら「こういうことかな？」と自分なりに考えることも含みます。そして、これも「違いから学ぶ」ということだと考えます。

各セッションでの発表はいずれも個性的で特徴のある団体・活動であり、したがって、そこには様々な違い、すなわち学びの「種」が散りばめられていました。そこから一つ挙げるとするならば、「地域活性化」とは何だろうということがあります。これは皆さんから随所に発せられた言葉ですが、同じ「地域活性化」でも、人によって意味が違っていたように思われました。詳細は省きますが、私がここで大事だと考えることは、「何が正解か」を議論することではなく、「あなたはその言葉にどのような意味を込めたのか」です。また「私たちはその言葉をどのように使っていくのか」です。誰か他の人（政治家？経営者？市町村長？研究者？）が言ったことをそのまま借用したという場合もあったかもしれません。けれども、「全国まちづくり若者サミット」としては、この言葉に対して皆さんそれぞれがそこにどのような内実（中身）を見出そうとしているのか、さらには、この言葉の行く手に、どのような「まち」の未来を展望しようとしているのかが気になり、もっと考えあいたいと思ったところです。こうした「種」を内に育てつつ、また次に皆さんとお目にかかって共に語りあえる機会があることを楽しみにしています。

「全国まちづくり若者サミット２０２２」報告書
発行　一般財団法人日本青年館
〒160-0013　東京都新宿区霞ヶ丘町４－１
電話　03-6452-9012　ＦＡＸ　03-6452-9016
URL　https://nippon-seinenkan.or.jp/seinenkan/
E-mail　koueki@nippon-seinenkan.or.jp

1927年（昭和2年）2月20日　新交響楽団（NHK交響楽団の前身）第1回定期演奏会　日本青年館ホール　近衛音楽研究所提供



神宮外苑 **日本青年館ホール**（1,249席）

〒160-0013　東京都新宿区霞ヶ丘町4番1号
TEL：03-6447-5660
最寄り駅：東京メトロ銀座線外苑前駅2b出口、徒歩5分

日本青年館ホール　検索

日本青年館分館

山中湖旭日丘温泉 ホテル清渓

音楽合宿プラン

世界文化遺産・富士山のふもと、豊かな自然を育む富士箱根伊豆国立公園内に「山中湖畔荘ホテル清渓」はあります。
敷地は約10,000坪！　気兼ねなく音出しが出来ます。　標高約1,000mの浄い空気の中で過ごすひとときは、きっと皆様にとって有意義となることでしょう。グランドピアノやコントラバスなどの大型楽器も取り揃えております。

宿泊料金　お一人様1泊2食付　消費税別

	本館　和室利用	別館　洋室利用
8/23～3/31	6,600円	7,600円
4/1～7/17	7,000円	8,000円

＊除外日：年末年始、ゴールデンウィーク、お盆期間などホテルが指定する日及び満室日

プラン特典

大型楽器
メイン会場
コンパ会場

ご利用 無料!

グランドピアノ、コントラバス、ティンパニ、バスドラム、シロフォン、グロッケンなどなど・・・
豊富に取り揃えております

※詳しくはお問い合わせください

ホール（257㎡）

充実のファシリティ

本館　和室

体育館

世界遺産・富士山のふもと

山中湖旭日丘温泉
ホテル 清渓

〒401-0502
山梨県南都留郡山中湖村平野506-296
TEL　0555-62-0020
FAX　0555-62-4460
Mail　seikei@nippon-seinenkan.or.jp

←公式サイトへはこちらよりどうぞ

アクセス

◆公共交通機関で

・バスタ新宿より中央高速バス
⇒山中湖旭日丘下車徒歩約10分

・富士急行線富士山駅乗り換え
・JR御殿場線御殿場駅乗り換え
⇒路線バスにてゴルフ場入口下車すぐ

◆お車で

・東富士五湖自動車道山中湖I.C.より約10分

（カーナビがマップコードに対応している場合は 434 254 375*70 と入力してください）

日本青年館ホテル

インターネットからのご予約

http://www.nippon-seinenkan.or.jp

（ベストレート保証）

NIPPON SEINENKAN HOTEL GAIEN TOKYO

日本青年館ホテル 検索

〒160-0013
東京都新宿区霞ケ丘町 4-1
TEL 03-3401-0101
FAX 03-3405-5830